

学生保育サポーター事業のプログラム評価

Evaluation of Child-Nurturing Support Program by Students

川 瀬 隆 千

現代社会における子育て支援の課題は、①若い世代に対する親準備教育の提供、②母子カプセル状態で孤立しがちな子育て家庭への支援、③コミュニティ・メンバーを主体とした地域ぐるみの子育て支援ネットワーク作りであるといえる。宮崎公立大学社会心理学研究室とNPO法人ドロップインセンターは、このような課題の解決を目指して、2006年度より、宮崎市とその近郊において、学生保育サポーター事業を行っている。これは事前に研修を受けた学生保育サポーターが週に1回、原則として2人1組で同じ家庭を訪問し、おむつ替えや育児補助、子どもの遊び相手などの活動を行うボランティア活動である。本報告は、プログラム評価の手法を用いて、学生保育サポーター事業を検討し、プログラムの改善につなげるとともに、現代社会の緊急課題である子育て支援に必要な情報を提供するものである。本事業への参加学生・家庭を対象にアンケートを実施した結果、学生サポーター事業は参加者から高く評価されていた。すなわち、参加学生は子育てに関する自信が付き、自分が親になることをイメージできるようになり、地域での子育て支援活動に関心を持つようになっていた。参加家庭の母親たちは学生の家庭訪問が子育てのサポートになり、子どもに家族以外の人と接する機会を与えることができ、母親自身も家族以外の人と話す機会を得て、人間関係が広がっていた。最後に、本事業の新たな展開の可能性が示された。

キーワード：子育て支援、親準備教育、プログラム評価、学生ボランティア活動

目 次

- I. 現代社会における子育て
- II. 課題解決への取り組み：学生保育サポーター事業の目的
- III. 学生保育サポーター事業の概要
 - 1. 学生保育サポーター事業の概要
 - 2. 学生保育サポーター事業における5つのアクション
- IV. プログラム評価
 - 1. プログラム評価の目的と方法

2. プログラムの階層と評価アプローチ

V. 学生保育サポーター事業のフレームワークとプログラム評価

1. 学生保育サポーター事業のニーズ評価

2. 学生保育サポーター事業のプロセス評価

VI. 今後の課題

VII. 引用文献

I. 現代社会における子育て

育児経験がほとんどないまま母親になる人が増えている。原田（2004）は乳幼児を持つ母親を対象に行われた1980年の大阪での調査と2003年の兵庫での調査を比較し、自分の子どもが生まれるまで、小さな子どもに食べさせたり、子どものおむつをかえたりした経験の全くない母親が41%から56%に増加していると報告している。逆に、そのような経験のよくあった母親は22%から17%へ減少しているという。

少子化の影響もあり、身の回りで赤ちゃんや子どもに触れる機会も減少している。その結果、抱っこしたり、おむつを替えたりするのは、自分の子どもが初めて、という親が増えてきたのである。このような結果を受けて、原田は「現代日本における子育ての困難さは親が乳幼児を知らないことにある。実際の育児を実体験させる機会が必要である」と述べている。わが国の子育て支援における最大の課題は「親準備教育」の欠如であるといえる。

乳幼児を知らないまま親になった母親にとって、子育てについて日常的に話し合える子育て仲間の有無は精神的安定に極めて大きな影響を及ぼす。親の精神的安定は子どもとの関わり方に大きな影響を持ち、子どもの心身の発達に及ぼす影響も大きい。しかし、先に述べた原田（2004）の報告によれば、近所にふだん世間話をしたり、赤ちゃんの話をしたりする相手が全くいない「孤立した母親」が16%から35%に増加しているという。3人に1人の母親はまったくの孤立状態なのである。

全ての人にとって、孤立は大きなストレスである。子育て中の母親も例外ではない。原田は「母子カプセル状態」で孤立している母子を救い出すことが子育て支援の緊急課題であるとしている。乳幼児のことを知らず、回りから孤立して、孤軍奮闘している母親の姿が浮かぶが、原田（2004）は育児でイライラすることがある母親が16%から46%へと大幅に増えていることも報告している。

このような背景が児童虐待の増加にも少なからず影響を及ぼしていると思われる。厚生労働省大臣官房統計情報部（2006）によると、平成7年度、児童相談所が相談を受けた虐待数は2,722件であったが、平成11年度には1万件を超え、11,631件となった。さらに、13年度には23,274件と2万

件を超え、16年度にはついに3万件を突破して、33,408件となっている。児童虐待は最近10年間で10倍以上に増えているのである。

児童虐待の増加や少子化問題、さらに凶悪な少年犯罪の増加などを受けて、子育て支援は現代社会の緊急課題となっている。

従来、わが国では、子育ての私的責任を強調してきた結果、少子化や子ども虐待などの社会問題を招いたという反省から、最近の子育て支援は、子育ての社会的意義を強調し、必要な支援や介入を進める方向に大きくシフトしている（柏女, 2004）。

特に、地域（市町村）の役割を重視するような方向転換がなされ、市町村を中心として次世代育成支援に重きを置くようになってきた。次世代育成支援とは「家庭や地域の子育て力の低下に対応して、次世代を担う子どもを育成する家庭を社会全体で支援すること」（少子化対策推進関係閣僚会議, 2003）であり、従来の「仕事と子育ての両立」に加えて、「男性も含めた働き方の見直し」、「地域における子育て支援」、「社会保障制度における次世代支援」、「子どもの社会性の向上や自立の促進のための取り組み」などが含まれる。

社会全体で子育て家庭を支援しながら、若い世代の親準備教育を展開していくためには、より地域に密着したきめ細かい活動が欠かせない。文部科学省中央教育審議会答申「少子化と教育について」（2000）では、子どもを地域全体で育てる必要性を訴えており、子育てが終わった人や子どもを持たない大人の子育て支援への参加を呼びかけている。この点について、後藤・箕口（2005）は、従来の子育て支援の枠組みは、コミュニティの専門職（心理、福祉、保育、教職など）が子育て当事者を支援することが主流だったのに対し、今後はコミュニティ・メンバーを主体とした子育て支援がますます重要性を増してくると述べている。

まとめると、現代社会における子育て支援の課題は、①若い世代に対する親準備教育の提供、②母子カプセル状態で孤立しがちな子育て家庭への支援、③コミュニティ・メンバーを主体とした地域ぐるみの子育て支援ネットワーク作りであるといえる。

II. 課題解決への取り組み：学生保育サポーター事業の目的

宮崎公立大学社会心理学研究室とNPO法人ドロップインセンターは、このような課題の解決を目指して、2006年度より、宮崎市とその近郊において、学生保育サポーター事業を行っている。学生保育サポーター事業とは、事前に研修を受けた学生保育サポーターが週に1回、原則として2人1組で同じ家庭を訪問し、おむつ替えや育児補助、子どもの遊び相手などの活動を行う学生によるボランティア活動である。

先に述べたように、現代の子育て支援における第1の課題は「若い世代に対する親準備教育の提供」である。少子化の影響などで、これから親になる若い世代は乳幼児と触れ合う機会が少なく、子どもや子育てについての知識や技術がほとんどない。これから親になる若い世代（大学生）に子

どもや子育てについての知識や技術を提供することが、親準備教育の内容となる。

その主なものとして、①子どもを知る（子どもの行動や認知、発達など、子どもに関する基本的な知識を身につけること）、②子どもの扱いを知る（子どもの抱き方や授乳の仕方、オムツの替え方などの子育ての基本スキルを養うこと）、③子どもへの対応を知る（子どもに共感的に対応できる技能を身につけること）などが考えられる。

このような知識を提供するにはいろいろな方法が考えられるが、使える知識、実践的な技術を提供することが望ましい。育児の現場、すなわち家庭に触れることによって、子どもや子育てについての知識や実践的な技術を身につけることができるだろう。学生による子育て家庭の訪問が企画されたのはこのような理由からである。

第2の課題「母子カプセル状態で孤立しがちな子育て家庭への支援」のためには直接的なコミュニケーションのチャンネルを作り、子育ての現場である家庭そのものに手を差し伸べる必要がある。

大学生による子育て家庭の訪問は、子育て中の母親に育児補助の機会を提供するだけでなく、コミュニケーションの機会も提供する。大学生は子育てについては未経験であるが、立場も考え方も異なる相手とのコミュニケーションは、母親にとって自分自身を客観的にとらえ直し、気分転換する機会を提供することにもなるだろう。もちろん、大学生側の親準備教育としても有効である。

また、学生が子育て家庭を訪問して母親を支援するという新しいタイプの子育て支援の仕組みは、従来の専門家による一方的な子育て支援とは異なり、現代社会における子育て支援の第3の課題である「コミュニティ・メンバーを主体とした地域ぐるみの子育て支援ネットワーク作り」とつながる。コミュニティ・メンバーは、専門職とは異なり、育児については素人であるが、素人であるがゆえに、母親との間に対等な「共助の関係」を作りやすいだろう。

大学生の場合には、地域外からその大学のある地域に移り住み、4年間を過ごしたのち、また別の地域に移っていくものも多い。一貫してコミュニティにかかわるわけではないので、コミュニティ・メンバーとは言い難く、大学生と母親との関係が対等であるとも言えない。しかし、若い世代を教育しながら、子育て支援のネットワークを広げる試みは、地域における子育て支援の新しいモデルとなる可能性があるだろう。

III. 学生保育サポーター事業の概要

1. 学生保育サポーター事業の概要

最初の本格的な学生保育サポーター事業は宮崎公立大学の学生16名（男子3名、女子13名）と宮崎市およびその近郊に居住する8家庭が参加して、2006年7月から2007年2月にかけて実施された。

2006年度の事業の概要は表1に示すとおりである。参加学生・家庭を募集した後、学生に対し

ては、オリエンテーションと事前研修（保育サポーター養成講座）を、家庭に対してもオリエンテーションを行った。その後、学生と家庭のカップリングを行い、学生の訪問家庭を決定し、約3ヶ月にわたる家庭訪問を開始した。家庭訪問期間中には、参加学生を対象に、定期的に（2週間に1回程度）活動報告会を開催し、活動内容を把握するとともに、活動に関する情報交換を行った。また、参加家庭を対象にした中間報告会を開催し家庭側の意見を聴取したり、参加学生と家庭との意見交換を行ったりした。最後に、事業に参加したすべてのメンバーが集まって、最終報告会を開催し、活動全体を振り返った。

家庭訪問期間中には、学生・家庭双方から活動記録の提出を求めた。1回の活動につき、1枚の活動記録カードを提出してもらった。また、事業開始時に参加学生・家庭への事前アンケート、事業終了時に参加学生・家庭への事後アンケートを行った。

学生保育サポーター事業は2006年度以降も継続的に実施されている。2007年度事業は前期と後

表1 2006年度学生保育サポーター事業の概要

活動事項	時期・期間	参加者	内容
参加学生・家庭募集	2006年 7月～9月		チラシ配布、講義中の情報提供など。
オリエンテーション	2006年 9月中旬	学生 16名	事業の趣旨・今後の流れなど説明、顔合わせ・自己紹介（2時間程度）。 学生の実態・意識調査（事前調査）。
学生保育サポーター養成講座	2006年 9月下旬	学生 16名	子どもの発達や保育に関する知識の習得、学生のカップリング、事業への主体的な参加のための意識啓発等。一日2時間の研修を4日間。最後に保育園での実習。
出会いのワーク	2006年 10月中旬	学生 16名 8家庭。	家庭訪問事業の趣旨、今後の流れを説明した後、参加家庭と学生とのカップリング。
家庭訪問	2006年 10月下旬～ 2007年 2月末	学生 16名 8家庭。	週1回2時間の家庭訪問（学生2人1組）を実施。実施回数は10～15回。 家庭訪問期間中、定期的に（1回/2週）、学生保育サポーターミーティング（1時間程度）を実施。学生同士の情報交換。
中間報告会	2007年 1月中旬	8家庭	実施状況の確認。意見交換を実施。
最終報告会	2007年 2月上旬	学生 16名 8家庭。	最終的な実施状況の報告と意見交換。 学生の意識調査（事後調査）と家庭（母親）の意識調査。

期に分けて2回行われ、2008年度は年間を通して実施しているが、活動事項や内容については2006年度事業と大きな違いはない。

2007年度前期の事業に参加したのは宮崎公立大学の学生13名（男子4名、女子9名）と宮崎市およびその近郊に居住する7家庭、2007年度後期の事業に参加したのは宮崎公立大学の学生14名（男子3名、女子11名）と宮崎市およびその近郊に居住する7家庭であった。

2. 学生保育サポーター事業における5つのアクション

表1にも示したように、学生保育サポーター事業は大きく5つのアクションに分けられる。オリエンテーション、保育サポーター養成講座、出会いのワーク、家庭訪問、報告会である。

オリエンテーションでは、参加学生とスタッフ、あるいは参加学生同士の顔合わせを行うとともに、学生保育サポーター事業の主旨、概要、今後の流れについて説明した。学生保育サポーター養成講座では、子どもの発達や保育に関する知識の習得、学生のカップリング、主体的な活動のための意識啓発などを行った。出会いのワークでは、学生（2人1組）と家庭とのマッチングを行った。学生と家庭が初めて顔を合わせる場面になるので、時間をかけてお互いの情報を交換し合った。学生保育サポーター事業の主要なアクションである家庭訪問までに、上のような準備的なアクションを実施している。家庭訪問期間中に中間報告会、家庭訪問終了後には最終報告会を実施し、家庭訪問における各家庭の活動状況を報告してもらうとともに、今後に向けての意見交換などを行った。

このように学生保育サポーター事業においては家庭訪問を中心にさまざまなアクションを実施している。次に、プログラム評価について説明した上で、家庭訪問に関するプロセス評価を中心に、学生保育サポーター事業についての評価を行う。

IV. プログラム評価

1. プログラム評価の目的と方法

プログラム評価とは、社会問題の緩和を目指す社会プログラムの効果をシステムティックに検討して、プログラムを改善したり、活動に有益な知識を提供したりすること（ロッシ・リップセイ・フリーマン、2005）である。

最終的な成果を評価することと思われがちだが、それだけがプログラム評価なのではない。プログラム評価では、プログラムに関するニーズ、プログラムの設計や運営、サービス提供などのプログラムのプロセスや効率性等も評価される。

プログラム評価の目的は活動に関する知識を提供することである。すなわち、プログラム評価は、コミュニティの問題に対する新たなアプローチが実施する価値のあるものかどうかを示したり、あるアプローチを継続するのか、修正するのか、中止するのかの意思決定を促したりする際の

情報となる。つまり、プログラム評価はプログラムの改善やプログラムに関する説明責任、知識生成などを目的としている。

評価の目的に応じて、実際に行われる評価の性質は異なる。プログラムの改良を目指す時には「形成的評価」、説明責任に応えるためには「総括的評価」、知識生成を目的とする場合には「学術的研究評価」が行われることになる。

プログラム評価を行うためには、評価されるプログラムの実績に関する記述とその実績について判断を下すための標準あるいは基準が必要となる。適用可能な基準に基づいて、それと的確に照合できる形で、プログラムの実績について妥当な記述を構築することがプログラム評価の中心課題と言える。

2. プログラムの階層と評価アプローチ

社会プログラムには始まったばかりの新規プログラムもあれば、長年にわたって展開され、成熟したプログラムもある。プログラム評価を実施する際には社会プログラムの発達過程を考慮し、適切な評価アプローチを用いる必要がある。

① ニーズ評価

ニーズ評価はもっとも基礎的なプログラム評価である。ニーズを評価するということは、社会問題の性質、大きさ、広がり、介入の必要性の程度、介入を設計するための社会状況の意味合いを評価することである。ニーズ評価は新しいプログラムを計画する場合や確立されたプログラムを再編成したり、再構築したりするときに行われ、どのようなサービスが必要とされているのか、どうすればそのようなサービスがうまく提供できるのかなどについての基礎的な情報を提供するものである。

② プログラム理論の評価

ニーズが明らかになったら、社会問題を解決するために実現可能なプログラムを計画することになる。プログラム計画はプログラムに関する仮説（目標を達成するために、プログラムがどのような役割を果たすのかという仮説）を含むので、プログラム理論とも呼ばれる。プログラム理論の評価とは、その理論がどの程度合理的で、実行可能であり、倫理的で、適切かを評価することである。

③ プロセス評価

理論的に妥当なプログラムであったとしても、それがきちんと実施されなければ、問題の状況は改善されない。プロセスの評価はプログラムの活動や運営を評価することである。プロセス評価はプログラム評価の中で最も頻繁に行われるものであり、次に述べるインパクト評価を実施する

ためには不可欠の評価である。

④インパクト評価/アウトカム評価

社会プログラムを実施した結果、望ましい状態が得られたとしても、それは必ずしもプログラムの成果とは言えない。望まれた結果はプログラムとは関係のない要因によっても生じるからである。したがって、いつ、どのような評価デザインを用いて、プログラムの成果を評価すべきか、と言うことは難しい問題である。プログラムのインパクトや成果(アウトカム)の評価には専門性と多くの時間・資源を必要とする。インパクト/アウトカム評価は、成熟し、安定したプログラムに用いることが適している。

⑤費用と効率の評価

費用と効率の評価はプログラム評価階層の最上段にある。社会プログラムの功績はプロセス評価やインパクト評価を基礎とした上で、さらにそのプログラムの費用と効率性を、代替的なプログラムと比較して、判断することになる。プログラムの費用と効率性の評価も成熟したプログラムへの適用となる。

V. 学生保育サポーター事業のフレームワークとプログラム評価

図1に学生保育サポーター事業のフレームワークを示す。一般的な社会プログラムのフレームワークと同様、学生保育サポーター事業も目的、仮説、方法、結果(成果)、評価の順に事業を展開している。図1には学生保育サポーター事業の展開に合わせて、評価アプローチも記載されている。

1. 学生保育サポーター事業のニーズ評価

先に述べたように、学生保育サポーター事業の目的は、①若い世代に対する親準備教育の提供、②母子カプセル状態で孤立しがちな子育て家庭への支援、③コミュニティ・メンバーを主体とした地域ぐるみの子育て支援ネットワーク作りである。

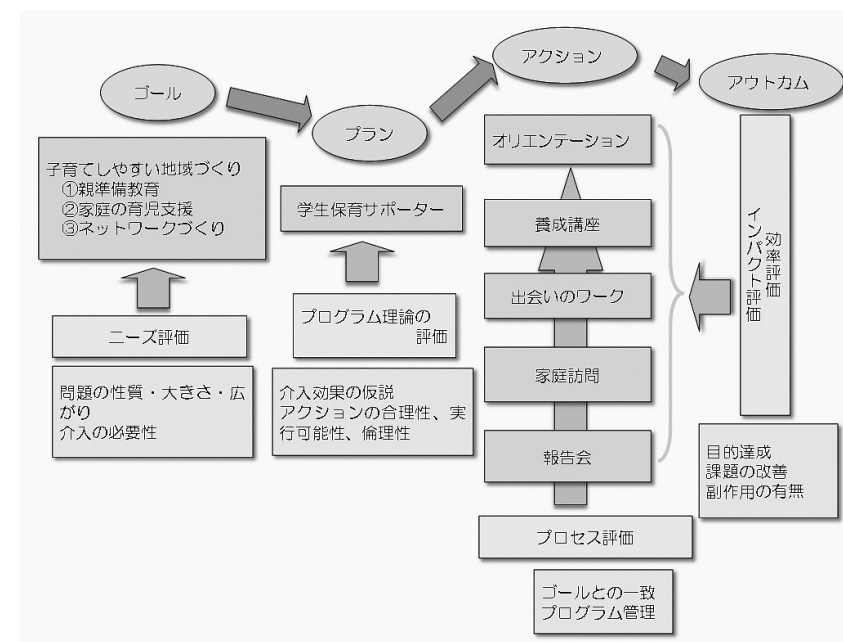
本事業の共同実施者であるNPO法人ドロップインセンターでは、日常的に子育て支援活動を展開する中で、母子カプセル状態で孤立しがちな家庭の支援と大学生などこれから親になる若い世代の親準備教育を同時に展開する方法として学生保育サポーターが構想された。

これらの事業目的に関する一般的なニーズ評価は行われていないが、事業に参加した学生と家庭を対象に事業への参加動機などを尋ねるアンケートを行っている。以下に、2006年度事業におけるアンケートの結果を示す。

1) 参加学生の乳幼児との接触経験

参加学生のこれまでの、また日常的な乳幼児との接触経験(「子どもをあやす」「オムツを替える」

図1 保育サポーター事業のフレームワークとプログラム評価



「乳幼児と遊ぶ」などの経験、「乳幼児の世話をしたり、乳幼児と遊んだりするようなボランティア活動」の経験)について尋ねた(表2)。

「大いに当てはまる」を4点、「全く当てはまらない」を1点として、参加学生16名の平均点を算出したところ、すべての項目の平均点が1点台であった。参加学生たちは、これまで、乳幼児の世話をしたり、一緒に遊んだりする機会をほとんど持っていなかったことがわかる。

表2 乳幼児との接触経験に関する質問と回答結果

	平均	SD
①普段の生活の中で、子どもをあやしたり、オムツ替えをしたりするなど、乳幼児の世話をする機会がある。	1.33	0.90
②普段の生活の中で、乳幼児と遊ぶ機会がある。	1.40	0.91
③これまで、乳幼児の世話をしたり、一緒に遊んだりするボランティア活動に参加したことがある。	1.93	1.16

2) 参加学生の保育サポーター事業への参加動機

保育サポーター事業への参加動機について、「子どもと遊びたい」とか「世話をしたい」「子どもが好きだ」と言うような保護的な動機に加え、「子育て体験をしてみたい」「親になったときの参考

表3 保育サポーター事業への参加動機

	人数
①子どもと遊びたいから	9
②子どもの世話をしたいから	8
③子どもが好きだから	10
④乳幼児の発達に興味があるから	4
⑤子育てを体験してみたかったから	10
⑥子育て家庭の様子を知りたいから	7
⑦将来、親になったときに参考になるから	13
⑧子育て家庭を支えたいから	3
⑧母親と子どもの関係について知りたいから	5
⑨家庭訪問に興味を持ったから	2
⑩母親とコミュニケーションをしてみたいから	2
⑪他にはないボランティア活動だから	9

にしたい」と言うような親準備教育と関わる動機、「家庭訪問をしてみたい」「子育て家庭を支えたい」「母親とコミュニケーションしてみたい」などのネットワーク作りに関する動機も含めて、参加学生に提示した。

表3に示す11の回答選択肢に複数回答可で答えてもらったところ、もっとも多かったのは「将来、親になったときに参考になるから」という回答であった。「子どもが好きだから」、「子どもと遊びたいから」などの回答も多かったが、将来、親になったときのために、「子育てを体験してみたい」という気持ちが強いことが伺える。

3) 参加家庭の母親たちの日常の子育て意識

本事業に参加した母親たちの子育てに関する意識を検討するため、「リラックスや息抜きの時間」「自分の子育てを客観的に見直す機会」「普段の人間関係」「子育てネットワーク作りへの意識」などについて尋ねた（表4）。

「大いに当てはまる」を4点、「全く当てはまらない」を1点として、参加家庭の母親8名の平均点を算出した。その結果、母親たちはリラックスする時間を持っているが、息抜きの時間、自由に振る舞える時間もほしいと思っているようだ。自分の子育ての良いところと悪いところを認識し、子育てを冷静に見直す機会も持っている。家族以外の人と話す機会もあり、人間関係を維持して、社会の動きから取り残されているとは感じていない。

このような点から、今回参加した家庭の母親は精神的にも健康で、安定した状態にあることが分かる。最初に述べたような「母子カプセル状態」や「孤立」などの問題は抱えていないようである。

表4 母親たちの子育てに関する意識

	平均	SD
①普段の生活の中で、のんびりリラックスする時間を持っている。	3.00	0.76
②普段の生活の中で、息抜きの時間が欲しいと感じることがある。	2.88	0.83
③子どものことを考えずに、自由に振る舞いたいと思うことがある。	2.63	0.92
④自分自身の子育てを冷静に見直す機会がある。	2.50	0.76
⑤自分の子育ての良いところも悪いところも十分に認識していると思う。	2.63	0.92
⑥自分の子育てに自信がある。	2.13	0.64
⑦家族以外の人と話す機会が少ないと感じることがある。	1.63	0.52
⑧人間関係が狭くなったと感じることがある。	1.88	1.13
⑨社会の動きから取り残されていると感じることがある。	1.88	1.13
⑩子育ては、母親に任せるのが一番だと思う。	1.38	0.52
⑪地域の人々が子どもや子どもを持つ家庭に関心を寄せるべきだと思う。	3.50	0.53
⑫子育てや子育て家庭をサポートする地域の仕組みづくりに参加したい。	3.25	0.46

2. 学生保育サポーター事業のプロセス評価

プロセス評価とはプログラムの活動や運営を評価することである。前述のように、学生保育サポーター事業は大きく5つのアクションを含むが、ここでは主要なアクションである家庭訪問について検討する。参加学生と家庭には家庭訪問活動を行うごとに活動記録を提出してもらっている。学生側の活動記録の記載内容を表5に、家庭側の記載内容を表6に示す。

表5に示した項目のうち、項目①、③、⑤、⑦、⑧は自由記述式の質問であり、それ以外の項目

表5 学生側の活動記録の内容

①遊び：どこで、誰と、どんな遊びをしたか
②子どもと十分に遊ぶことができたか
③育児補助：どこで、いつ、どんな補助
④家庭の育児を補助することができたか
⑤コミュニケーション：どこで、いつ、誰と、どんな内容
⑥家族とのコミュニケーション
⑦今日の活動での工夫・うまくいったこと
⑧今日の活動での失敗・困ったこと・要望
⑨活動の個人的な満足度
⑩活動を通して家庭をどの程度援助できたか
⑪子どもや家庭に関わることができたか

表6 家庭側活動記録の内容

①学生保育サポーターをどのように活用したか
②学生の訪問は育児のサポートになったか
③学生保育サポーターは子どもと何をして過ごしたか
④子どもは学生の訪問を喜んでいたら
⑤学生保育サポーターと一緒にいった活動は
⑥学生とどのような話をしたか
⑦学生の訪問により気分転換やリラクスの時間が取れたか
⑧学生とコミュニケーションできたか
⑨学生を受け入れるにあたり、工夫した点は

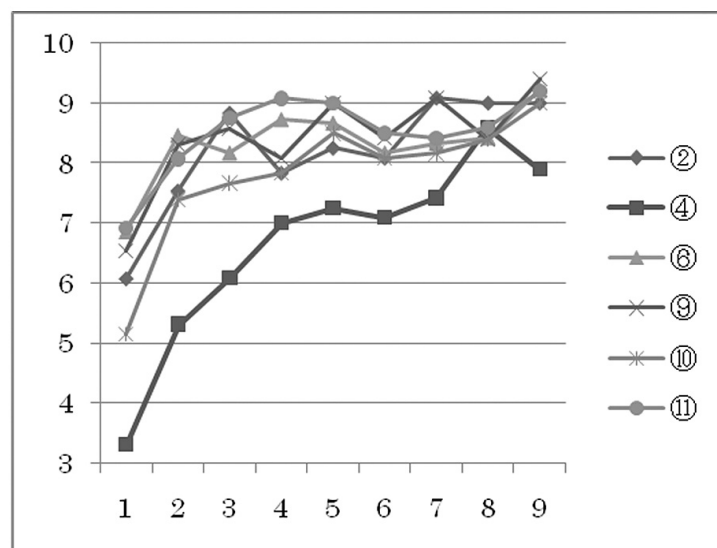
②、④、⑥、⑨、⑩、⑪は自己評定式の質問（「全くない」～「十分に」の11段階）になっている。表6に示した項目のうち、項目①、③、⑤、⑥は自由記述式の質問、項目②、④、⑦、⑧は自己評定式の質問（「全くない」～「十分に」の11段階）である。

1) 家庭訪問に関するプロセス評価：参加学生の意識と行動の変化

図2に、2007年前期の事業における自己評定式の質問項目に対する回答の平均を時系列的に示す。

図2から、保育サポーター活動に関する学生の自己評価や満足感は活動回数が増えるほど高く

図2 保育サポーター活動への学生の自己評価



なっていくことがわかる。特に、前半（1回～4回）の上昇が著しい。学生は活動の前半で活動への自己評価を高めるようである。

また、自由記述の「①遊び」については、子どもの年齢、家庭の事情などによって異なるが、ダンボールハウス作りなど、学生の工夫を生かした遊び、普段の母親と子どもだけの生活ではできないような遊び（絵の具・花摘みなど）、外出などが多い。「③育児補助」については、子どもの世話をする、一緒に遊ぶことなどが報告された。また、「⑤コミュニケーション」については、母親との間には友達のような関係が作られ、恋愛話なども交わされていた。子どもとのコミュニケーションは遊びをしながらの会話である。

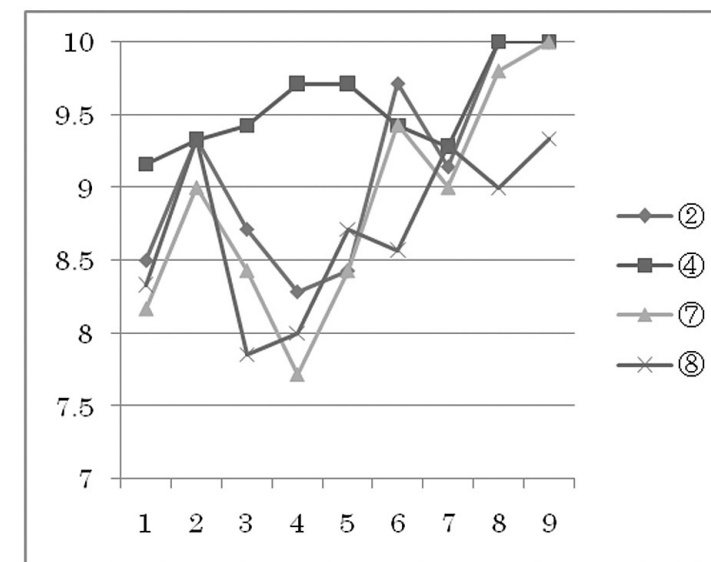
2) 家庭訪問に関するプロセス評価：家庭側の意識と行動の変化

図3は自己評定式の4項目についての参加7家庭の平均を時系列的に示したものである。

学生保育サポーターに関する家庭側の評価は「項目④ 子どもは学生の訪問を喜んでいたら」を除いて、活動の途中（3回目、4回目）でいったん低下し、その後、再び上昇する。

このように、学生側の意識の変化に比べて、家庭側の意識は必ずしも直線的には増加しない。家庭訪問を始めて3、4回が過ぎると、家庭訪問への評価が低下する。すなわち、学生の訪問は育児サポートになっていると思えないし、気分転換やリラクステーションにもなっていないし、学生とコミュニケーションも取れないと言う評価になる。この減少傾向は5回目以降上昇に転じ、最終的には家庭側の評価は高くなるが、家庭側の最初の期待の大きさに学生の活動が追いついていないために、生じるものであろう。

図3 学生保育サポーター活動への家庭の評価



自由記述の「①保育サポーターの活用」については、子どもと遊んでもらっている間に家事をするなどが多い。「⑥学生との会話」については、大学の話や学生時代の話、恋愛や結婚の話、将来の進路、子どもの話や保育サポーターの話など、いろいろな話題を共有している。

3) 保育サポーター事業のプロセス評価のまとめ

学生保育サポーター事業は、学生にとって生きた親準備教育になっていた。学生たちは家庭訪問を楽しみながら、子育てについて学んでいたようである。

一方で、家庭側の評価には、一時的な低下がみられた。3回目、4回目の訪問になると、学生、家庭双方とも最初の緊張感が解けてくる。家庭側から見れば、学生に任せてよい部分、学生には任せられない部分が見えてくるものと思われる。学生の訪問のすべてが育児のサポートになるわけではなく、学生に任せてリラックスできるわけでもないと感じることが、活動に対する家庭側の評価を一時的に下げる結果になっているのではないかと思われる。

このような傾向が一般的に認められるものなのかを検証した上で、今後、活動の方法等について再検討する必要がある。

3. 学生保育サポーター事業のインパクト評価

インパクト評価では、目標が達成されたかどうかを評価する。また、副作用が含まれていないのかも評価する。良かれと思って実施している事業にも悪影響が含まれる。そのような問題の有無を慎重に見極めることになる。

1) 学生保育サポーター事業の成果：学生の意識や態度に及ぼす影響

学生保育サポーター事業の目的は、①若い世代に対する親準備教育の提供、②母子カプセル状態で孤立しがちな子育て家庭への支援、③コミュニティ・メンバーを主体とした地域ぐるみの子育て支援ネットワーク作りである。本事業により、これらの目的がどの程度達成されるかを検討するため、参加学生に対して、事業開始前と事業終了後に同一の質問を行い、その回答を比較することにした（表7）。それぞれの項目について「大いに当てはまる」を4点、「全く当てはまらない」を1点とし評価させた。

2006年度事業で得られた結果について検討したところ、事業終了後の学生の意識・態度は開始前の意識・態度よりも肯定的な方向に変化しており、学生保育サポーター事業が学生たちの親準備教育となることが確かめられた。

このような結果は、参加学生は保育サポーター養成講座や家庭訪問を通して、子育てに関する自信が付き、自分が親になることをイメージできるようになり、また、地域での子育て支援活動に関心を持つようになったことを示している。

2) 学生保育サポーター事業の成果：母親の意識や態度に及ぼす影響

表7 学生保育サポーター事業が学生の意識や行動に及ぼす影響	事前	事後
① 自分ひとりで、しばらくの間、乳幼児の世話をする自信がある。	1.69	3.08
② しばらくの間、乳幼児と楽しく遊ぶ自信がある。	2.33	3.58
③ 子どもが悪いことをしたとき、上手に叱ったり、注意したりする自信がある。	1.85	2.31
④ 子どもがどんな気持ちでいるのか、理解できると思う。	1.69	2.77
⑤ 将来、自分が母親（父親）になる姿をある程度想像することができる。	2.46	3.38
⑥ 子どものいる生活をある程度明確にイメージすることができる。	2.46	3.46
⑦ 子ども連れの人を見かけたら、荷物を持ったりするなどの手伝いをしたと思う。	2.85	3.62
⑧ 近所で子どもを連れた人を見かけたら、声をかけたいと思う。	2.5	3.08
⑨ 近所の子どもたちの世話をしたり、一緒に遊んだりしたいと思う。	2.62	3.23
⑩ 身の回りに子育て中の人がいいたら、家事や育児などを手伝いたいと思う。	2.69	3.46
⑪ 地域の人々が、地域の子どもや子育て家庭に関心を持つよう働きかけていきたいと思う。	2.38	3.15
⑫ 子育てや子育て家庭をサポートする地域の仕組みづくりに参加したい。	2.85	3.38

母親たちの本事業に対する評価は、本事業の成果を検討する上でも、今後の事業展開の方向性を探る上でもきわめて重要である。そこで、学生保育サポーターの効果について、「実際の育児補助」「人間関係を広げるきっかけ」「自分の子育てを客観的に見直す機会の提供」の観点から尋ねた（表8）。

「大いに当てはまる」を4点、「全く当てはまらない」を1点として、参加家庭の母親8名の平均点を算出した。人数が8人と少数なので、統計的に明確なことは言えないが、参加家庭の母親たち全員が、学生保育サポーターの訪問により、子どもの面倒を見てもらうことができ、家庭訪問が子育てのサポートになった、と答えている。また、子どもに家族以外の人と接する機会を与えることができ、母親自身も家族以外の人と話す機会を得て、人間関係が広がったと答えている。学生保育サポーター事業は参加家庭の母親の育児負担を軽減し、子育て家庭の人間関係を広げる効果があったと考えられる。

VI. 今後の課題

2006年度より学生保育サポーター事業を展開してきた。学生保育サポーター事業は学生たちに親準備教育を提供し、子育て中の母親に対する育児支援になっていることが認められた。学生保育サポーター事業はこれからも継続していくが、これまで事業には一定の評価を下すことができ

表8 学生保育サポーター事業が母親の意識や態度に及ぼす影響

① 保育サポーターの大学生に、子どもの面倒をみてもらうことができた。	3.75
② 保育サポーターの家庭訪問により、子どもに、家族以外の人と接する機会を与えることができた。	4.00
③ 保育サポーターの家庭訪問により、子どもの世界を広げることができた。	3.50
④ 保育サポーターの大学生に、子育て家庭の実情を知ってもらうことができた。	3.25
⑤ 保育サポーターの大学生と、コミュニケーションを取ることができた。	3.50
⑥ 保育サポーターの大学生に、自分の気持ちや思い、意見など話すことができた。	3.63
⑦ 保育サポーターの大学生に、自分の体験を伝えることができた。	3.38
⑧ 保育サポーターの家庭訪問により、家族以外の人と話す機会を得ることができた。	4.00
⑨ 学生保育サポーター事業に参加して、人間関係を広げることができた。	3.88
⑩ 保育サポーターの家庭訪問は子育てのサポートになった。	3.88
⑪ 保育サポーターの家庭訪問は、自分の子育てを見直す機会になった。	2.88

るだろう。

しかし、これまでの事業には解決すべき2つの問題があると考えられる。1つは同じ事業に参加する母親間のネットワークが形成されていない問題であり、もう1つは宮崎市内でも地域的に遠くの家が参加できないことである。今後、これらの問題を解決するために、事業に参加する家庭・学生間のネットワーク作りの支援と、学生保育サポーター事業の範囲を拡大することを目指す。

また、本事業のプログラム評価についての検討も必要である。より効果的な事業展開のためにプログラム評価の内容・方法を見直す必要がある。

1) ネットワーク作りの試み

上で述べたように、今後、宮崎市における子育てネットワーク作りを支援するため事業に参加する家庭・学生間のネットワーク作りを支援していきたい。

具体的には、「保育サポーター新聞（仮称）」を作成し、保育サポーター事業に参加する家庭・学生に対して継続的に配布して、定期的に情報提供を行う。

インターネットを利用したネットワーク作りが盛んであるが、本研究ではむしろ古いメディアである新聞に注目する。乳幼児を持つ母親にとってインターネットにアクセスし、情報を入手するのは必ずしも容易ではないし、インターネットが利用できない家庭も多い。また、外出先などで友人知人に簡単に見せることができるのは、むしろ新聞のような紙媒体であるからである。

新聞によって提供する情報は、①保育サポーター事業に参加している家庭において学生がどのような活動をしているのか、各家庭はそれぞれどのような形で学生を受け入れているのかなど、学生保育サポーター活動に直接関わる情報、②参加家庭、参加学生の紹介など参加者に関わる情報、③地域の育児支援に関する情報、④現代社会における育児を取り巻くさまざまな情報（発達心理学の知見など）などを考えている。

このような情報提供を継続しながら、従来から行ってきた報告会や意見交換会などを行うことで、地域における子育て・育児支援のネットワーク作りに貢献できるだろう。

2) 質的・量的拡大

また、今後は学生保育サポーター事業の範囲を拡大していきたいと考えている。他大学の学生に参加を呼びかけ、広く受け入れて、事業範囲を拡大していくことができる。

規模の拡大によってもっとも心配されるのは、質の低下と情報の不行き届きである。そこで、従来から行われている養成講座の充実、学生保育サポーターを束ねるスタッフの養成と配置、各大学における学生保育サポーターの拠点作りなどが必要になるだろう。

また、学生保育サポーターひとりひとりの活動を的確に把握するシステムを構築することも必要である。地域のニーズに応えとともに、学生の社会活動をバックアップする体制を整える必要がある。

3) プログラム評価の課題

最終的には、学生保育サポーター事業の成果を適切に評価する必要がある。プログラム評価の理論に沿って、本プログラムの効果と問題点を把握し、本研究で蓄積した知見を地域の他の活動にも応用できるよう一般化していくことが必要である。

今後は、より効果的な事業展開のために、学生保育サポーター事業についてのニーズ評価を行う必要がある。また、事業の理論化と他の事業への応用のためには、プログラム理論の整備も必要である。さらに、事業全体のプロセスを管理するためには、家庭訪問以外のアクションについてもプロセス評価を行う必要がある。より評価しやすい方法についての検討も必要である。

このように、学生保育サポーター事業はまだ数多くの課題を抱えているが、今後の展開が期待できる事業である。今後も事業のプログラム評価を行いながら、より効果的に事業を展開し、地域の問題解決に貢献していきたい。

VII. 引用文献

後藤悦子・箕口雅寛 2005 子育て支援ボランティア養成プログラムを受講したボランティアの変容－自己効力感とネットワークに焦点をあてて コミュニティ心理学研究, 1, 1-18.

- 原田正文 2004 変わる親子、変わる子育て－「大阪レポート」から23年後の子育て実態調査より－ 臨床心理学（金子書房）第4巻（子育て支援特集），586-590
- 柏女霊峰 2004 子育て支援と行政の取り組み 臨床心理学（金子書房）第4巻（子育て支援特集），579-585
- 厚生労働省大臣官房統計情報部（2006） 社会福祉行政業務報告結果の概況（平成16年度）
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/gyousei/04/index.html>
- 文部科学省中央教育審議会 2000 少子化と教育について http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/000401.htm
- ロッシ, P.H., リブセイ, M.W., フリーマン, H.E. プログラム評価の理論と方法－システムティックな対人サービス・政策評価の実践ガイド（大島巖・平岡公一・森俊夫・元永拓郎監訳），日本評論社，2005
- 少子化対策推進関係閣僚会議 2003 次世代育成支援に関する当面の取組方針 <http://www.mhlw.go.jp/topics/bukyoku/seisaku/syousika/0314-1.html>